

# 東京都美術館紀要 No.26

The Bulletin of Tokyo Metropolitan Art Museum

---

## 東京都美術館における建築ツアーについて

河野 佑美

---

# 東京都美術館における建築ツアーについて

河野 佑美

## はじめに

東京都美術館で実施している「建築ツアー」はそのきっかけとなったプログラムから数えると、約10年の歴史がある。そして、この10年で建築は「注目されるべき」ジャンルとして一般的に取り扱われるようになってきている。

例えば、建築やデザインを特集する一般雑誌として挙げられるだろう『Casa BRUTUS』<sup>1)</sup>の月刊化は2002年からであるが、この雑誌の中で人気アイドルグループのメンバーが特定の建築施設を訪れ、写真とともに紹介するシリーズが始まったのは2011年3月号<sup>2)</sup>からのことであり、そこには、最先端の有名建築だけではなく、いわゆる近代建築も含まれている。また、建築そのものをプログラムのテーマにするイベントも出てきている。例えば、2014年に大阪で始まった「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」<sup>3)</sup>は、今や150件以上の建築物が公開され、のべ4万人以上が参加する国内最大級の建築のプログラムとなっている。さらに、2017年の国立西洋美術館の世界文化遺産登録を受け、近代建築への注目度がさらに上がると同時に、「建築」が一つの文化資源(時には観光資源)と捉えられることが増えた<sup>4)</sup>と考える。

上記のような、建築を巡る様々な動きの中で、「建築ツアー」というプログラムの認知度も上がり、ツアー目的での来館者もいるほどであり、今では、ツアー参加受付開始後10分程度ではほぼ定員に達する状況になっている。

さて、本稿では、そのきっかけとなったプログラムから、現在に至るまで、その内容等について、参加者のアンケートや実施データをもとに報告する。その中で、このツアーを実

施するための前提となる「とびらプロジェクト」における建築にまつわる講座(建築実践講座)及びプログラム(とびらプロジェクト オープン・レクチャー)の内容、そして、このツアーの最大の特徴であり、居なくてはならない「プレイヤー」であり、「プランナー」である、アート・コミュニケータ(とびラー)たちの活動についても、実績とともに言及する。また、他館で開催されている建築ツアーと、とびらプロジェクト任期満了後のとびラーたちの活動を紹介する。最後に、社会が急速にダイバーシティ化する中で運用を始めた、多言語対応の建築マップの活用データを検証しつつ、これからのツアーの展望を考察する。

## 1) 建築ツアーのきっかけ

はじめに「とびラーによる建築ツアー」が誕生するきっかけとなったプログラムを振り返る。それは、2010年4月3日、4日に実施された「おやすみ都美館建築講座」<sup>5)</sup>というプログラムである(図1、2、3、4、5、6)。ここで実施したツアーが、現在の建築ツアーの原型となったのである。

当時、当館では、年に一回、親子向けのバックヤードツアーを行っていた程度で、現在の「アート・コミュニケーション事業」のようなプログラムは実施されていなかった。さらに、建築をメインに据えたプログラムの前例もない状態での実施であったが、募集を始めると、思った以上の反響があり、どの内容についても定員をはるかに上回る応募があった(図7)。

特に館内ツアーについては、参加の希望が多く、より多くの方に参加してもらえるよう検討の結果、館長・副館長をは



図1 おやすみ都美館建築講座チラシ(表面)

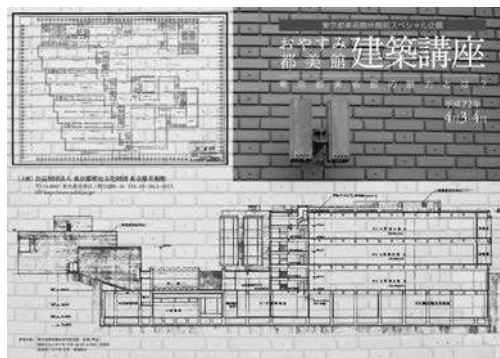


図2 同講座当日配布リーフレット(表面)



図3 同リーフレット(中間)

はじめとした、職員によるツアーを追加で実施することとした。どの職員も建築ツアーのガイドの経験はなかったように記憶している。それでも、館の平面図に書き込んだツアーのポイント（P26、資料1）と、自身の仕事に関係するようなところ、つまり、各自が詳しく説明できるポイントを中心に巡るツアーのガイドを務めた。いわば、建築ツアーの原型をこの時に行ったことになる。もちろん、登壇者の松隈洋氏や前川建築設計事務所の方々によるツアーに比べれば、専門的なツアーでないことは明白だが、それぞれの職員ツアーへの参加者の満足度も高く、専門家によるツアーでなくても、一定の満足度を与えられる手ごたえを感じた。同時に、このプログラムが、当館の建築を意識的に見てもらった最初の機会となり、それまで前川建築の作品集にもあまり露出されてこなかった、建築物としての「東京都美術館」がメディアで紹介される結果ともなった<sup>6)</sup>。

この講座についての参加者アンケートの中で「リニューアル後に期待する事業」の中で上位にあった意見が「今回をさらに発展させた建築講座」（24%）「リニューアルの目的等がわかる建築・館内ツアー」（13%）であり、参加者の3分の1の方から、何らかの建築にかかわる事業の期待が挙げられて

いた。このことをきっかけに、2012年の館のリニューアル後、建築ツアーが定期的に行われることが館の事業として決定されたのであった。

## 2) とびラーによる建築ツアー

さて、2012年のリニューアル以後実施されている建築ツアーについて、その特徴を含め記してゆく。まず第一に、建築ツアーを率いているのはアート・コミュニケータたちだが、彼らは、このツアーについて参加者と一緒にこの建物の魅力を発見し、見て回り、共有する「プレイヤー」であり、そのツアーをどのように構築していくかを考える「プランナー」である。そして、彼ら自身が当館の建築ツアーの特徴の一つであり、建築ツアーに居なくてはならない存在なのである。

彼らは、当館と東京藝術大学が運営する「とびらプロジェクト」<sup>7)</sup>に所属し、活動する「アート・コミュニケータ」、愛称「とびラー」である。市民から一般公募され、最長3年の任期で、当館を拠点にアートと人、人と人をつなぐ活動をしている。

彼らはこのツアーのガイドとして活動していくために、とびらプロジェクトの講座、アート・コミュニケータとしての



図4 同講座1日目 左：長谷川堯氏、右：松隈洋氏（撮影：後藤 充）



図6 同講座2日目 前川建築設計事務所元所員（高橋義明氏）による館内ツアー（撮影：後藤 充）



図5 同講座1日目 職員（館長 真室佳武）による館内ツアー。館長室にて（撮影：後藤 充）

	日付	内容	定員	応募数	参加者数
応募	4月3日	講演会	240	509	/
		ツアー	20	404	
	4月4日	講演会	240	343	/
		ツアー	45	344	
実績	4月3日	講演会	/	/	229
		ツアー（職員ツアー参加者含）	/	/	128
	4月4日	講演会	/	/	198
		ツアー（職員ツアー参加者含）	/	/	145

図7 同講座 申込及び参加者数実績一覧



図8 2018年度建築実践講座見学会 江戸東京たてもの園、前川自邸前にて

活動の基本的なアイデアを「基礎講座」で習得したのちに実際の活動に則した3つの実践講座のうち、「建築実践講座」に参加する。この講座は年7、8回開催される、建物と人とのつながりや、コミュニケーションの発生を考える講座である。当館の基本的な建築の歴史や設計者である建築家前川國男にまつわる「情報」の習得、建築、建築を媒介としたコミュニケーション、上野公園をキーワードにゲストによる講義やワークショップ形式の講座、建築を見に行く「見学会」（図8）、実際にプログラムを企画する講座など、充実した講座とワークショップを展開している。

建築実践講座を選択するとびラーは、毎年40～60名。加えて、とびらプロジェクトでは、アートを介して社会を豊かにしていくため毎年テーマを決めて「とびらプロジェクトオープン・レクチャー」を開催している。これまでの講義とそのテーマ、見学会の内容は27ページの資料2のとおり。とびラーたちはこのようなレクチャーから学びながら、自ら建築ツアーの内容を考え、ガイドを務めている。



図9 資料は本人のオリジナル。資料で、公募棟をわかりやすく図解したものの。

この「自ら考え」、というところが、当館の建築ツアーの特徴になっている。そもそも、彼らはボランティアでなく、自ら考え行動する「プレイヤー」＝「アート・コミュニケータ」なのである。加えて、当館のツアーは、いわゆるガイド形式でもなければ、専門的な知識を伝えることを目的ともしない。参加者自らが建物を意識的に見ることができるよう、建物を見ることの楽しさや発見の面白さを伝えること、また、それらの発見を参加者同士が共有できることをメインの目的としている。そのため、館からシナリオを用意することはしていない。もちろん、参加者との会話が弾むような、館でしか用意できないアイテム<sup>8)</sup>を用意しているが、それは「ツアーで見せてください」というものではない。とびラーたちは、こちらで用意している資料の他にも、自分のツアーを組み立てていく上で、より詳しく知っておきたいことを調べ、写真を用意したりして、オリジナルのツアーを組み立てていく（図9、10）。とびラーたち同士で勉強会も開き、お互い切磋琢磨しながら、ツアーの準備を行っている。例えば、このようなルートがある（図11）。

大きく分類すると次のようなキーワードの場所を巡っていることになる。「ロビー階の天井」「おむすび階段」「外壁タイル」「はつり加工」「新旧模型」「公募棟休憩室」。どの場所も、多くの方が来館した際に通っている、もしくは目に入っている可能性が高い場所である。その点も、このツアーのポイントといえるのではないかと。というのは、アンケートにもたくさん書かれるが、「知らずに通り過ぎていたことを知って面白かったです。」（2012年、60歳代、女性）、「何度もおとずれているのに、東京都美術館のごく一部しか見ていなかった事におどろき、異なる魅力をたくさん発見できました。」（2016年、40歳代、女性）というように、見ているけど見ていない、ということに気づき、また、建築を見ること



図10 当館で用意した資料を活用してのツアー

当館に関する見どころを一通り巡るルート	
ポイント	キーワード
1.ショップ前	かまぼこ形状になっている天井 天井の色 ペンダント照明
2.エントランス(正面入口)	コールドジョイント はつり アーチ タイル
3.公募棟(2階休憩スペース)	色 椅子 タイルカーベット
4.アートラウンジ	佐藤慶太郎(胸像) 都美の歴史 模型 おむすび型階段
当館を特徴づけている「タイル」を中心に見て回るルート	
ポイント	キーワード
1.ショップ前	タイル(屋内) かまぼこ形状になっている天井 天井の色 ペンダント照明
2.正門近く	建物の高さ 都美全体像 新旧タイル(屋外) 野外彫刻
3.公募棟(2階休憩スペース)	タイル敷きの敷地内
4.ギャラリー前	タイル(屋内) ギャラリー-吹き抜け はつり
敷地内に点在する野外彫刻を見ることも視野に入れたルート	
ポイント	キーワード
1.ショップ前	タイル(屋内) かまぼこ形状になっている天井 天井の色 ペンダント照明
2.講堂前	タイル(屋内) レリーフ
3.屋外	建物の高さ 都美全体像 新旧タイル(屋外) 野外彫刻
4.アートラウンジ	佐藤慶太郎(胸像) 都美の歴史 模型 おむすび型階段

図11 ツアールート例

が思っていたより楽しいことを発見し、参加者の中で一定の変化が起こるのである。例えば、「建物カラー(赤・黄・緑・青)を随所に使ってあり、それを探するのが楽しかった」(2013年、40歳代)「次回は展示だけでなく、建築にも興味をもって鑑賞したいと思った次第」(2018年、30歳代、男性)という声もある。専門的な言葉が並べられたツアーも魅力的であるに違いないが、自分自身で気づき、触れ、という方がより記憶に残るに違いない。この点を建築ツアーの根底のアイデアとして共有しているため、この類の感想は、本当にうれしいものである。時に、専門的なツアーではないことによる「やや不満」もアンケートからま見られるが、これについても、何か知識を得たい、と思って、このツアーに期待し、参加されたことが垣間見られ、今後参考にすべき意見だと前向きに捉えている。

当館の「とびラーによる建築ツアー」は2012年から実施され、現在、奇数月第3土曜日の午後2時から定期的に開催している。そして、そのきっかけとなった「おやすみ都美館

建築講座」から数えると、2020年で10年を迎える。ツアーの実施回数は45回、参加者人数は552人、かかわったとびラーの数は1131人を数える(全てのべ数)<sup>9)</sup>。

ツアーの実施時間は約45分間。館内の無料ゾーンを巡るツアーである。しかし、先に記したように、当初は、ウェブサイトからの事前申込制で運営をしていた。事前申込者だけでは定員とまらないことも多く、ツアー開催の当日に正面入口を入ったところで「本日建築ツアー実施します。ぜひご参加ください!」と、チラシ(図12)を手渡し、参加を呼び掛けていた。

その当時のアンケートを振り返ると、参加の動機は事前申



図12 建築ツアー開催告知チラシ(奇数月第2土曜日ツアー用) イラスト、デザイン共にとびラーによるもの

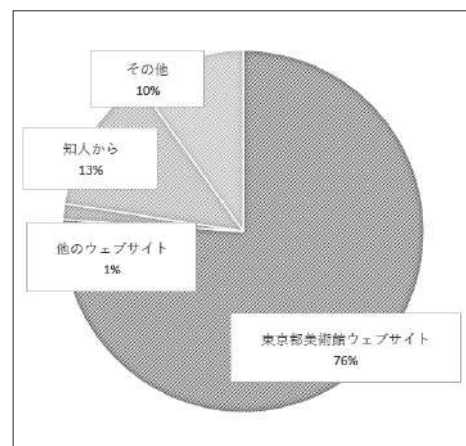


図13 2012年度ツアー情報入手経路(参加者アンケートより)

込制ゆえの、「東京都美術館のウェブサイト」「知人から」にあることが多かった。この「知人から」というのは、一緒に参加した同伴者から、「その他」は来館した時に声をかけられてという結果が見られる（図13）。

とはいえ、国立西洋美術館の世界文化遺産登録など、「建築」そのものに注目が集まってきて以来、建築ツアー目的での来館者も増え、現在ではツアー参加受付が始まる前に、受付場所である当館ロビー階のミュージアムショップ前に参加希望者がすでに集まっている状況となり、ツアー開始の15分前の受付開始数分で定員30名のうち、20名程度は埋まる、という状況が起きている。参加者の居住地域は関東を中心ではあるが、例えば京都や愛知からもこの建築ツアーを目的に来館した方がいることもアンケートからわかる。

### 3) とびラーたち自身によるさまざまな建築プログラム

とびラーたちは、建築ツアーのほかにも、「とびラボ」というとびラーの自主的な活動の中で、プログラムの発案をしてきた。例えば、夜間開館時の「トビカン・ヤカン・カイカン・ツアー」（図14）や夕暮れ時の「トビカン・トワイライト・

ツアー」の実施、建築セルフガイドマップ「トビカンみどころマップ」(2012、13、17、19年) (図15)<sup>10)</sup>、「Map of Tobikan's Highlights」(2013、19年)<sup>11)</sup>、「ヤカン・ミドコロ・スポット」(2013年)<sup>12)</sup>の発行など、建築ツアーを発端に、当館の建築をテーマとしたさまざまな活動が行われてきた。また建築ツアーそのものをワークショップ的に再構築したツアーも実施。「親子でGoGo! とびかん探検」(2017年) (図16)、「手話通訳付きツアー」(2017年)「とびかん建築ツアーハロウィン版」(2016年)「視覚障害のある方のためのトビカン建物ツアー」(2015年) (図17)がそれにあたる。例えば、トビカンみどころマップは、一人でも館を楽しく見て回れるように、とびラー目線の建築見所が紹介され、設計者前川國男についてのミニ情報<sup>13)</sup>が掲載されている。親子向けの探検ツアーは、親子がそれぞれのチームに分かれて館敷地内を探検し、その後、お互いの気付きや発見を親子で一枚のマップに書き込むワークショップ形式で実施された。視覚に障害のある参加者のためのツアーは、館の敷地にどのように建物が配置されているかを立体の建築模型にし、最初に直接触ってもらうことで、館の全体像を把握してもらえるよう配慮をし



図14 トビカン・ヤカン・カイカン・ツアー



図16 親子でGoGo! とびかん探検 親子でのマップ制作中の様子



図15 トビカンみどころマップ (一部)



図17 視覚障害のある方のためのトビカン建物ツアー

ている。それぞれのプログラムは、定期的に行っている建築ツアーには参加することが難しいことが予想される来館者に向け、それぞれの特性を考慮し、計画・実施されている。

#### 4) 他館ツアーの見学

当館では、リニューアルした2012年から定期的に、館の事業の一環としてこうした建築ツアーを行っているのだが、もちろんこの類のツアーは、今では珍しいものではなく、建物があるところには、何らかのツアーが開催されている。先述の建築実践講座では、とびラーたちに、他施設で行われているツアーへの参加を積極的に推奨している。なぜなら、建築ツアーのプランを考え、ガイドを務めるにあたり、どのようなツアーが、参加者にとって心地の良いものなのか、また、期待に応えられるものなのかは、その本人が参加者となり、体験・体感することが一番有効だからと考えているからである。そして、その体験記を年間最低1レポート提出することを講座の課題としている。見学の際には、ツアー中に、どのようなコミュニケーションが発生し、またその理由は何だったか、どんな振る舞いだったか、ということに注目して、それを課している。それは、当館のツアーが説明型のツアーではなく、コミュニケーション型のツアーでありたいと考えているからである。

提出されたレポートから見ると、美術館など多くの施設では職員もしくは学芸員によりツアー形式で実施されている。職員以外のツアーの場合は、ボランティアによるガイド、ということになる。そして、内容は、ルートが決まっていて、それに沿って、見学し、説明を聞くタイプのツアーが主流である。活発なコミュニケーションがツアー中に生まれているか、というと、なかなか難しそうである。これらの点を比較しても、やはり、担当するとびラー（ガイド）によって、ツアールートも異なり、伝える内容も各々人の興味によるところが多く、それがゆえに、リピーターも多い、当館の建築ツアーは、例外的であるといえるだろう。

参考になる例もある。例えば、「国立西洋美術館本館」<sup>14)</sup>へ見学に行ったとびラーのレポートでは、「ガイドから（答えやすい内容の）質問を投げかけていることによるコミュニケーションのスタート」があることに気づき、答えやすい質問を何度かやり取りすることで「参加者が抵抗なく言葉を発することを可能にしている」というそのツアーの良さを挙げている。他に「自由学園明日館」<sup>15)</sup>へ見学に行き、いわゆる「ガイド」形式のツアーに参加した時には、「ガイドが参加者ひとりひとりの目を見ながら話している」ことに気づき、コミュニケーションの介在についての言及が「そのガイドの振る舞いに因るもの」に気がついている。<sup>16)</sup>

#### 5) 任期満了後のとびラーたちの活動

見学先の一例に挙げた、神奈川県立音楽堂（以下、音楽堂）は定期的に「音楽堂見学会」という見学会を開催している。ミニコンサートとセルフツアー（各見所ポイントに説明パネル、展覧会で言う所のキャプション、が置かれている形式）から成っており、参加者各自で見て回る見学会の形式をとっていたが、京都工芸繊維大学の松隈洋教授の研究室の学生がかかわり、学生による「謎解きマップ」が配布されたこともあった。さらに、現在は当館のとびラーの任期満了生が関わり立ち上げた「bridge」<sup>17)</sup>という団体が関わり、彼らがガイドを務め、ツアーが行われている。このツアーは、2019年の音楽堂のリニューアル・オープンを機に、それまで不定期で行われていた見学会が定期的に開催されるようになり、「前川建築見学ツアー in 音楽堂」という事業名で、事前申込制で500円の参加費がかかる建築ツアーフルコース（60分間）と参加費無料のショートコース（20分間）の2種類が用意されている。いずれのツアーに於いても、bridgeのメンバーが音楽堂内の前川建築の特徴が色濃く見えるポイントを参加者と巡り、解説をするという形式で運営されている（図18）。

この建築見学ツアーは音楽堂の担当職員とbridgeのメンバーの丁寧なコミュニケーションのもとに、毎回ツアーのルートを協議し、実施に至っているという。また、2019年度にガイドを務めた10名のうち、9名がとびラーの任期満了生ということだ。bridgeのホームページを見ると、活動趣旨に、地域の文化やアートに親しむ活動をつくりあげるグループである、ということ、「楽しむ」「学ぶ」「つなぐ」をキーワードに建築ツアーなどを実施している、などとある。音楽堂でのツアーガイド以外にも、神奈川県立青少年センターでのガイドツアーや、音楽堂が立地する紅葉ヶ丘文化ゾーン近隣における建築物での活動も検討中とのこと。また、ガイドメンバーについても、現在はとびラー任期満了生がほとんどだが、今後は、地元の住民にも参画してもらえるよう整えていくという。当館での活動の任期満了後も、各自の地元で



図18 bridgeメンバーによる神奈川県立音楽堂でのツアーの様子  
(画像提供：bridge)

アート・コミュニケータの活動を続け、広げていっている好例である。

### 6) 様々な特性の来館者に向けた建築ツアーの展開

当館の公式ウェブサイトには、「建築ツアー」のためのページが設けられている<sup>18)</sup>。建築ツアーや夜間ツアーの日程の案内はもちろんのこと、とびラーたち製作による印刷物もPDFでダウンロードできるようになっている。建築ツアーの案内をしていると、時折、日本語以外の母語の方から参加できるかどうかの問い合わせを受ける。現時点では、日本語以外のツアーの用意はなく、英語のマップをご案内し、残念ながらツアーへの参加はお断りせざるを得ない状況にある。しかし、英語以外の母語の来館者もとても多くなってきている。その中で、15か国語に翻訳可能なウェブ上の他言語対応システムが2018年度に建築マップをテーマに導入された。それは、「QRトランスレータ<sup>®</sup>」<sup>19)</sup>というシステムで、スマートフォン等の携帯端末で表示するためのシステムだが、そのスマートフォン等で設定している言語で、その内容が表示される、というものである。例えば、筆者のスマートフォンの基本言語は日本語であるが、そうすると、日本語でそのコンテンツがまず表示されるようになっていく(図19)。

2019年の「言語別ページビュー数」については図20のグラフを参照いただきたい。半分以上は日本語母語の方の利用

であり、次に、英語圏の方の使用が多いことが見受けられる。ただし、当然のことながら、この使用についての言語分布と実際の来館者国別分布は異なり、2019年以前数年来、中国を中心にアジア圏からの来館者数が多くなってきていることも記しておく。

2016年度から若年層に向けてのプログラムも始められた。それは、Museum Start あいうえの(以下、あいうえの)<sup>20)</sup>のプログラムの中での実施である。あいうえのの参加対象は、小学校1年生から高校3年生までとその保護者である。2016～18年度には「うえの! ふしぎ発見」の中で、設計者や時代をキーワードとして、建築を観察することに重点を置いた「けんちく部」というプログラムを実施。加えて、あいうえのの特製ツールである「ミュージアム・スタート・パック」の配付会として開催されていた「あいうえの日和」、こどもたちが継続的にミュージアムを活用していくことができるように企画・開催されていた、「あいうえのスペシャル」の中の一つのコンテンツとして「こども建築ツアー」を実施。このツアーでは「発見する」ことに重点を置き、こどもたちは、グループリーダーを務めるとびラーと一緒に館の特徴的なポイントを観察しに行くのである。2019年度から始まった「オープンデイ キュッパ・チャンネル」の中では、初めてあいうえののプログラムに参加する家族向けのデビュープログラムにおいて、「こども建築ツアーコース」が設置された。こ



図19 QRトランスレータ版マップ トップ画面

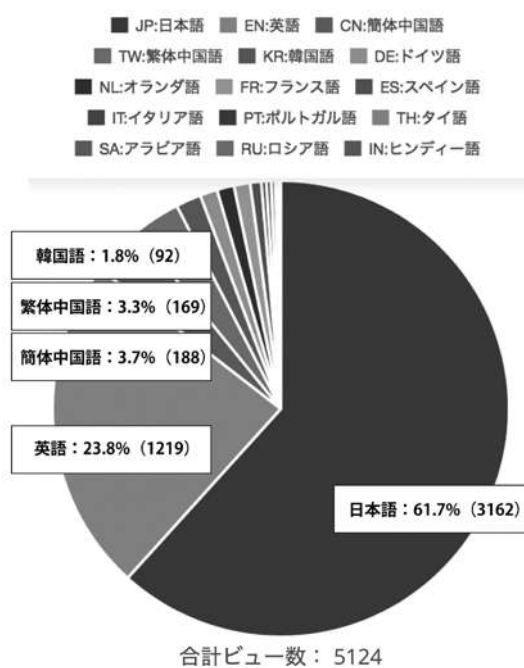


図20 言語別ページビュー数(統計対象期間 2019年1月1日～12月31日)

のツアーはこれまでのこどもツアー同様に都美の建築の面白いところを「発見する」タイプのツアー構成になっている。こどもたちは建築の観察に出かける前にグループのリーダーであるアート・コミュニケータ（とびラー任期満了生）と、写真の紙芝居で上野公園内での当館の位置、設計者の顔写真、当館の設計スケッチなどを見てから、建築の観察に出かける。出かけるときには、見ることにより集中できるようにと準備されたアイテムを持っていく。それは、丸くくり抜かれたカード（デッサンの時に使用するデスケルのようなもの）、建築部分が丸くカットされた写真カードの2種類である（図21）。まるで宝探しのようにカードと合う視点の場所を探しに行き（図22）、それが何であるかをグループ毎に考え、共有する。プログラム終了後に、保護者に鼻高々とその日の発見を伝えている姿を見かけることは本当に嬉しく、ほかの建物でも、宝探しのようにその建物の気になるポイントを探ることができるようなになれば、と願ってやまないのである。このツアーについては、改良を図りながら、「建物」そして、美術館そのものにより興味を抱いてもらえるよう継続して実施していく予定である。

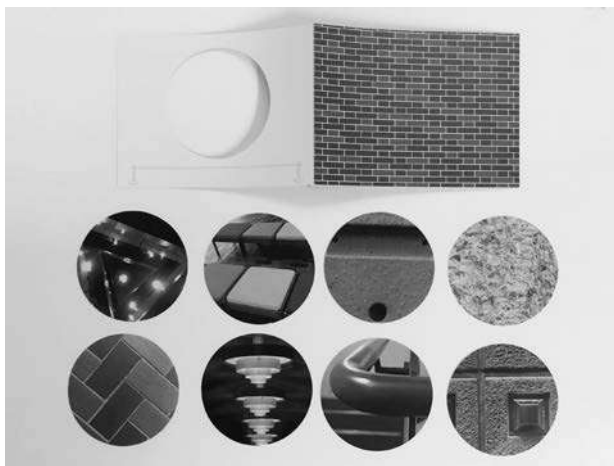


図21 ツアー用アイテム



図22 ツアーの様子

## おわりに

一番最近実施された建築ツアーは2019年1月25日14時からの定期ツアーであった。ここしばらくの傾向と変わらず、建築ツアー目的の参加者が多く、受付開始5分程度で、20名近い参加者が集まった。参加者たちは、みな、日本語ユーザーであり、年齢は20歳以上の大人ばかりであった。この日、館内にはハマスホイ展<sup>21)</sup>を見ることを目的にした人や、春節での旅行かアジア圏の人や、書道の公募展を見に来た家族、こどもたちもたくさんいた。しかし、彼らが建築ツアーに参加することはなく、参加受付の待ち列を興味深そうに見て、ツアーの案内看板を見て、そのまま立ち去る、という状況も見られた。

美術館には、様々な目的での来館がある。建築ツアーも一つの目的となりつつあることは前述の通りだが、どのような展開がこの先ありうるのか、まだ見ぬ建築ツアーはどのような形なのか、思案すべきことが多くある。それは単に言語の問題だけではなく、年齢や身体的な特徴など、様々な面から検討される必要がある。例えば、建物にはたくさんの思い出が詰まっている、とよく言われることから、建築を見ることが高齢者のための「ケア」として成り立つかもしれない。現物がそこにあるため、言語を飛び越えた気づきの共有がワークショップとして実現する可能性があるようにも思える。

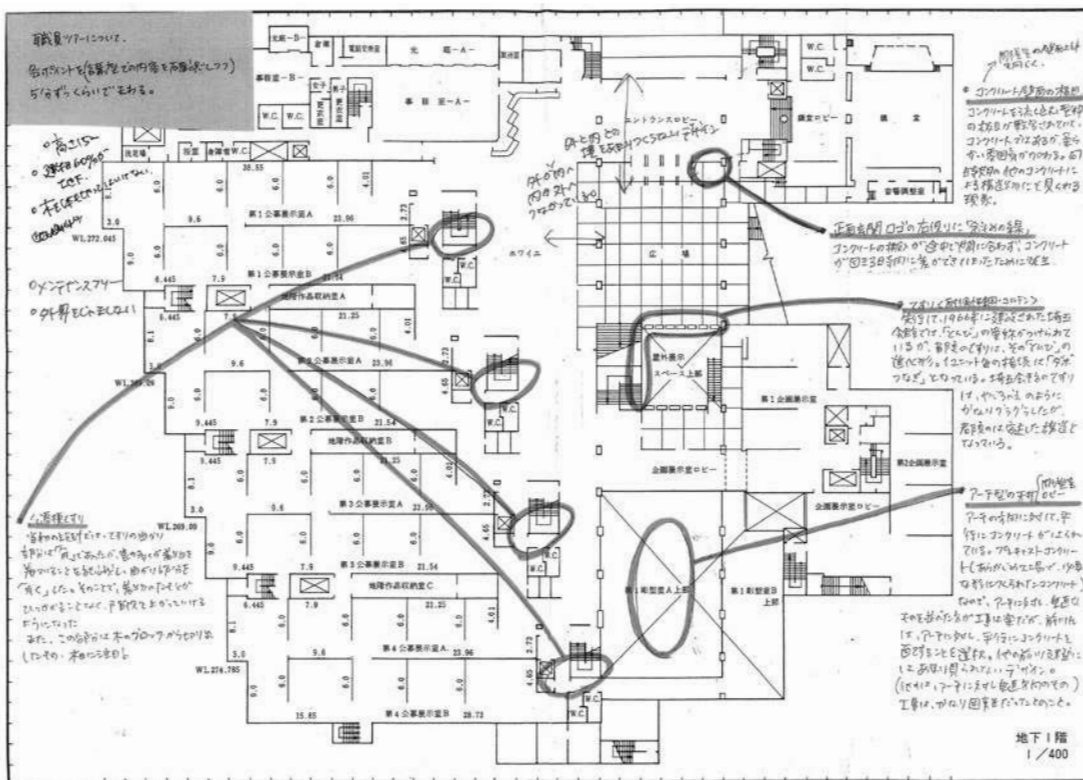
とびラーとともに運営しているこのツアーが、これからも当館の名物プログラムとしてあり続けるためにも、社会の動向を注視しつつ、参加者のニーズを意識し、プログラムの改善や展開を試みていく必要を感じている。

## 註

- 1) マガジンハウス Casa BRUTUS <https://casabrutus.com/>
- 2) 「櫻井翔のケンチクを学ぶ旅 vol.01 現代ビックリ建築を体験する」見学先は長野県茅野市の茅野市美術館（古谷誠章設計、2005年、茅野市民館、図書館などの複合施設）と茅野市神長官守矢資料館（藤森照信設計、1991年）。その他には例えば2014年3月号では旧岩崎邸、2014年9月号では東京都庁、2015年2月号では東京都庭園美術館など、竣工年を問わず様々な建築物を見学に行っている。また、2018年12月号では、創刊20周年の記念号の第3弾として、「建築を巡る旅」という1冊丸ごと建築特集を組んでいる。現代建築を率いる建築家や、日本の建築家の相関図などが掲載されている。もちろん表紙は櫻井氏が務めている。
- 3) 生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪公式ウェブサイト <https://ikenchiku.jp/>
- 4) 他にも、2019年には東京建築アクセスポイント（<http://accesspoint.jp/>）という建築見学街歩きを開催している一般法人が東京・品川区と一緒に始めた「オープンしなけん」（<https://shinaken.jp/>）など、建築を鑑賞対象として、街全体をミュージアムとして捉えるようなプログラムも各地で開催されている。また、当館の設計者である前川國男についてのプログラムでいえば、「近代建築ツーリズムネットワーク」（<http://www.city.hirosaki.aomori.jp/jouhou/keikaku/matn.html>）という前川國男の建築物を文化交流拠点として活用している9自治体がかかわる組織が青森県青森市を中心に立ち上げられ、全国的にプログラムの実施を行っている。

- 5) 1日目の全体テーマは「前川國男の建築と東京都美術館」。まず、長谷川堯氏による「前川國男が追い求めた建築とは？」という講演において、「日本の建築界の中で必ずしも公認されている考えではない」、「設計者の立場ではなくユーザーの立場から見た」という前置きのもと、前川國男の人柄や建築思想について、建築史家の視点からの言及があり、続いて、松隈洋氏による「前川國男のミュージアム建築と東京都美術館」という前川國男の建築の中でも特にミュージアムの建築についての言及がなされた。加えて、「前川國男建築の魅力とは？」というテーマでの長谷川氏と松隈氏の対談と松隈氏による館内ツアーが実施された。2日目は「東京都美術館の設計思想—建築事務所関係者に聞く」とし、前川國男建築設計事務所所長である橋本功氏、2010年当時の副所長東原克之氏、1975年に当館が竣工した際の、現場の担当をされた元所員、川島一夫氏・高橋義明氏に当館が建設された時代のことや、事務所における前川國男の人柄、日常のことも含め、当時の写真や模型を使ってお話しいただいた後に、1日目と同様に、当館の建築を見て回った。
- 6) 各誌への掲出実績：松隈洋「モダニズム建築⑩」東京都美術館 | 前川國男の設計活かして、大規模改修開始『建築ジャーナル』建築ジャーナル、2010年5月、p26～27、高野清見「都美術館大改修前川國男の設計思想継承」『読売新聞』2010年5月20日12版、15面、『公共建築ニュース』公共建築協会、2010年6月号、p10～12、など。
- 7) 東京都美術館×東京藝術大学 とびらプロジェクト公式ウェブサイト <https://www.tobira-project.info>
- 8) 外壁のタイルの現物や、かまぼこ型（ヴォールト）の天井のコンクリートの色付けに使ったとされる素材（インド砂岩）、改修時に採用されたタイルカーベットのの見本、ロビー等のスツールの座面の張地見本（1975年ころのもの）、改修前後の写真20種類ほど、を用意している。
- 9) 2020年1月25日時点での統計（2019年度建築ツアー全6回のうちの5回目）、詳細はp30の資料3参照のこと。
- 10) トビカンみどころマップ [https://www.tobikan.jp/media/pdf/2017/ac\\_tobikanmap\\_combine.pdf](https://www.tobikan.jp/media/pdf/2017/ac_tobikanmap_combine.pdf)
- 11) トビカンみどころマップ（英語版） [https://www.tobikan.jp/media/pdf/2019/ac\\_tobikanmap\\_en.pdf](https://www.tobikan.jp/media/pdf/2019/ac_tobikanmap_en.pdf)
- 12) 東京都美術館 ヤカン・ミドコロ・スポット [https://www.tobikan.jp/media/pdf/h25/architecture\\_nightSpot.pdf](https://www.tobikan.jp/media/pdf/h25/architecture_nightSpot.pdf)
- 13) とびら目線による前川國男の3コマプロフィールや、前川國男

- 物解説、都美近くで見られる前川建築所在マップなどが掲載されている。いずれもとびらによる編集、前川建築設計事務所、学芸員らの確認を経て公開。イラストもとびらたちの手による。
- 14) 国立西洋美術館ウェブサイト内「美術トーク/建築ツアー」ページ内 <https://www.nmwa.go.jp/jp/events/talkandtour.html>  
ツアーは事前予約制。ボランティアスタッフによるもの。ツアー参加費はかからないが、常設展観覧料が必要
- 15) 自由学園明日館ウェブサイト内「見学」ページ内建物ガイド [https://jiyu.jp/tour/#ak\\_bld](https://jiyu.jp/tour/#ak_bld)  
ツアーは当日受付。明日館スタッフによるもの。ツアー参加費はかからないが、施設見学料が必要
- 16) とびらたちの参加先は、次のような場所がある。（ ）の情報は参加当時のもの。国立国会図書館 国際子ども図書館（事前申込、無料、職員ツアー）、東京文化会館（バックステージツアー：事前申込制、有料）、東京国立博物館（事前申込制、無料、ボランティアガイド）、日本銀行本店（事前申込制、無料、職員ツアー） 日岩崎邸庭園（当日受付、無料、ボランティアガイド）、目黒区総合庁舎（事前申込制、有料、ボランティアガイド）、東京ステーションギャラリー（当日受付、無料、学芸員ツアー）、渋谷区立松涛美術館（当日受付、無料、学芸員ツアー）、林芙美子記念館（当日申込、無料、ボランティアガイド） 江戸東京たてもとの園（当日受付、無料、ボランティアガイド）、都立図書館（各館で実施、一部事前申込、無料、司書ツアー） 神奈川県立音楽堂（事前申込制、見学会形式）、など、すべてを挙げるにはスペースが足りないほどである。上野公園に所在する各館をはじめとして、様々な施設で実施されていることがわかる。
- 17) bridge公式ウェブサイト <https://bridgeart2019.wordpress.com>  
また、彼らの活動はマグカル・ドット・ネット「聴いてよし！観てよし！県立音楽堂で前川建築のモダニズムを堪能」 <https://magcul.net/180147> にも掲載されている。
- 18) 東京都美術館公式ウェブサイト「建築ツアー」ページ <https://www.tobikan.jp/learn/architecturaltour.html>
- 19) QR トランスレータ版建築マップトップページ <https://qrtranslator.com/0000005767/000001>
- 20) Museum Start あいうえの公式ウェブサイト <https://museum-start.jp/>
- 21) 「ハマスホイとデンマーク絵画」展 2020年1月21日～3月26日



資料1 職員用ツアーマップ（作成：筆者）

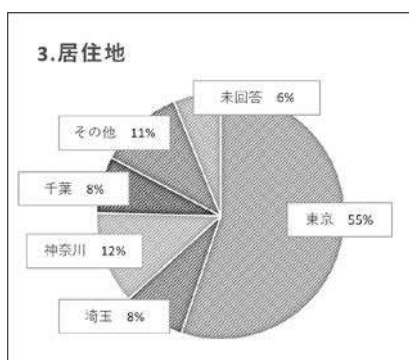
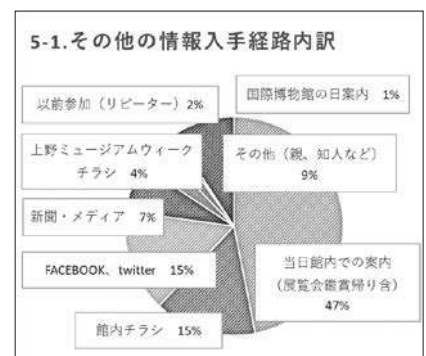
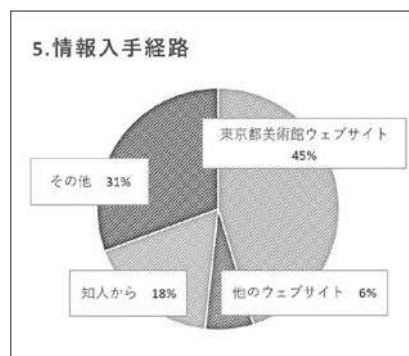
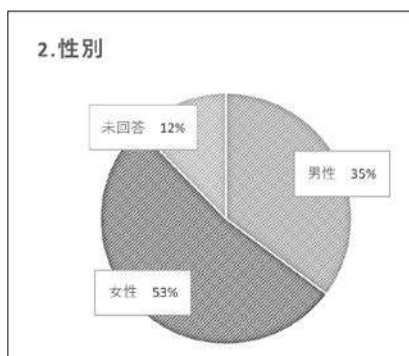
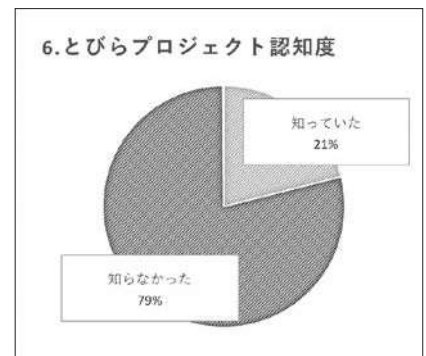
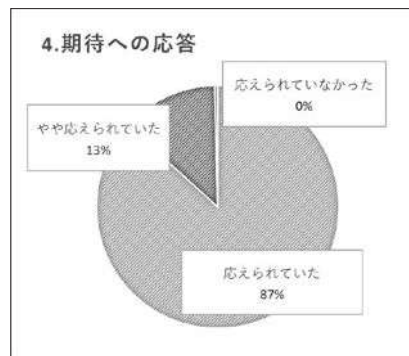
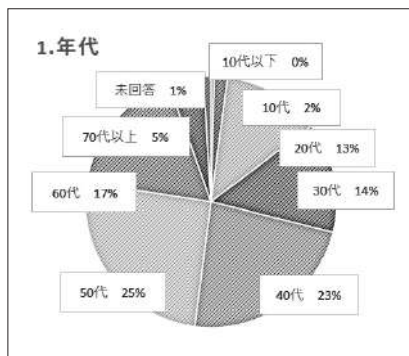
資料2 講座一覧

\*付のレクチャーの内容は、テキスト又は動画がとびらプロジェクトのウェブサイト (<https://tobira-project.info/archive-ol10/>) に公開されている。

年度	内容	講師 (肩書は登壇当時)	テーマ
2012年	建築ツアー	松隈洋 (建築史家、京都工芸繊維大学教授)	東京都美術館の特徴を見て知る
2013年	ゲスト講義	東原克行 (前川建築設計事務所副所長)	前川建築について
	ゲスト講義 (とびらプロジェクト・オープンレクチャー vol.2)*	佐藤由巳子 (前川國男 元・秘書、佐藤由巳子プランニングオフィス主宰)	人間・前川國男を語る
	見学会		江戸東京たてもの園 (前川自邸)
2014年	年間テーマ: 建物を楽しむ目を持つ。生活の中にプラスアルファな楽しみを発見できるようになる		
	ゲスト講義	斉藤理 (山口県立大学准教授)	「まちあるき」「オープンアーキテクチャー」の実践から
	見学会		近現代建築見学ツアー (銀座)
2015年	年間テーマ: 建築空間を通して生まれるコミュニケーションの場づくりについて考え、プランを実践する。		
	ゲスト講義	橋本功 (前川建築設計事務所所長)	前川國男の建築について
	ゲスト講義	木下直之 (東京大学名誉教授)	上野の土地に建物が建つ意味: 上野は語るが多すぎて_上野公園と都美の関わりや様々な文化施設の並ぶ上野の文化的背景など
	ゲスト講義	田中元子 (建築コミュニケーター、ライター)	建築とコミュニティ_パーソナル屋台でマイパブリックをつくらう!
2016年	年間テーマ: 建築空間を通して生まれるコミュニケーションの場づくりについて考え、プランを実践する。		
	ゲスト講義 (とびらプロジェクト・オープンレクチャー vol.6)*	青木淳 (建築家)	青木淳が語る前川國男——中心のない建築: 彼の目指したデザインとは?
	ゲスト講義	君塚和香 (東京藝術大学特任助教)	藝大の未来・今・昔
	ゲスト講義	田中元子 (建築コミュニケーター、ライター)	建築とコミュニティ_パーソナル屋台でマイパブリックをつくらう!
2017年	年間テーマ: 建築空間を通して生まれるコミュニケーションの場づくりについて考え、プランを実践する。		
	ゲスト講義	藤原徹平 (建築家、横浜国立大学大学院准教授)	前川國男の建物について
	ゲスト講義	倉方俊輔 (大阪市立大学准教授)	建物とまちと人をつなぐ—都美のある地域を中心に
	ゲスト講義	伊藤香織 (東京理科大学教授)	まちとの関わりを考える
	見学会		迎賓館赤坂離宮
2018年	年間テーマ: 建築空間を通して生まれるコミュニケーションの場づくりについて考え、プランを実践する。		
	ゲスト講義	伊藤香織 (東京理科大学教授)	建築から始まるコミュニケーション
	ゲスト講義	松隈章 (一般社団法人聴竹居倶楽部代表理事)	建築を守り、遺すということ
	見学会	橋本功 (前川建築設計事務所所長)	前川國男の建築
2019年	年間テーマ: 建築空間を通して生まれるコミュニケーションの場づくりについて考え、プランを実践する。		
	ゲスト講義	伊藤毅 (東京大学名誉教授)	上野地域のなりたち
	ゲスト講義 (とびらプロジェクト・オープンレクチャー vol.10)*	佐藤慎也 (建築家、日本大学理工学部建築学科教授) 藤原徹平 (建築家、横浜国立大学大学院准教授)	モノのための美術館? 人のための美術館? —コミュニケーションと建築のいい関係
	ゲスト講義	田中元子 (建築コミュニケーター、ライター)	人々の能動性を引き出すコミュニケーションのつくりかた
	見学会		国立近現代建築資料館・旧岩崎邸庭園

資料3 参加者統計（2012年～2019年1月末時点）  
 グラフは、建築ツアーの参加者アンケートによるもの（アンケート回収率82%）

プログラム名	建築ツアー			トピカン・ヤカン・カイカン・ツアー			トピカン・トワイライト・ツアー		
	回数	とびラー	参加者	回数	とびラー	参加者	回数	とびラー	参加者
2019	5	73	129	11	105	211			
2018	6	101	155	16	129	390			
2017	6	69	181	12	85	188	1	27	19
2016	6	62	138	14	75	188	2	14	23
2015	5	71	157	11	81	217			
2014	6	67	126	12	115	223			
2013	6	50	130	5	61	57	1	5	24
2012	5	59	115						
計	45	552	1131	81	651	1474	4	46	66



3-1.【その他の地域内訳】

茨城	13%	京都	3%
栃木	13%	岐阜	3%
大阪	11%	秋田	3%
静岡	6%	宮城	2%
新潟	6%	高知	2%
愛知	5%	石川	2%
青森	5%	広島	2%
群馬	5%	岡山	1%
北海道	3%	三重	1%
福島	3%	山形	1%
福岡	3%	サウジアラビア	1%
兵庫	3%	ベルー	1%